

Title	雜報
Author(s)	
Citation	地球 (1929), 12(3): 233-236
Issue Date	1929-09-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/183649">http://hdl.handle.net/2433/183649</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

○英領馬來の椰子油

椰子から生産されるものは、パーム油、パーム核心及同核心油の三つである。

パーム油は之が生産原料とした果實の色合によりて、其色も亦橙黄色より濃い橙色までの範圍に亘り、又熱帶地にてはパーム油の密度は其含有する酸性の度合に應じ半液體より凝固體迄に分れ、其硬度は酸性度の高きにつれて増大する、パーム油の用途の方向範圍は主として其含有する酸性度によりて決定せらる。石鹼及蠟燭の製造原料として其含有する遊離脂肪酸の高度の融點は攝氏の四十七度乃至五十度であつて、この點が蠟燭に適するのである。馬來から出る遊離脂肪酸三〇程度の良質のパーム油からは食用油及脂肪竝植物性バターの製造に向けるゝ外に、高級石鹼の原料として優秀好適である、但しかゝる食用油又は高級石鹼の製造に供する場合にパーム油を漂白する必要がある。普通空氣を流通せしめるのであるが、大量のパーム油の漂白に際してはボタシウム、バメクロメートルと鹽酸との合成物によつて之を行ふ。

脂肪酸五乃至七〇の程度の比較的酸性度低きパーム油は葉鐵製造上の材料の腐蝕止用に利用され貨車及機關車の車軸につける催滑油の製造に供する、パーム油は同時に内燃機關用の燃料として良好な成績を上げてゐる、たゞその消耗が高

くつのでまだ十分に利用されてゐない。

パーム核心油はその高級品は植物性バター及チヨコレートに利用される。又核心油そのまゝ石鹼に用ひる。

現在世界に於けるオイルパーム油及パーム核心の生産高は前者二五—二八萬噸、後者五八—六三萬噸と稱せられ其大半はニセリヤ地方からでる、佛領ダホー、白領コンゴ等之につき生産品の一部は土人の食用となり、大部分は輸出せらる輸入國は英及米の二國であり、獨逸はパーム核心を輸入するしかるに馬來半島では高級品の産出を以てその誇としてゐるけれどもまだ以て微々たる状態であつて、一九二六年スマトラで輸出高パームオイル一萬二千噸、パーム核心二千噸にすぎず、馬來にてはパーム七百五十噸、核心百七十噸にすぎないので、まだ盛んであるとはいへぬ。蓋しパームの本場は西アフリカであつて馬來方面は近年の着手であるからである、たゞ西アフリカのパームは品質甚しく劣悪で、酸性度は上等品でも一八%内外を例とする、とてもマライ産に比較にならぬ故にこゝで一氣張りをすればマライ地方はパームオイルの供給地として見込が多い。

序に云ふ、パーム油を送くる爲めに樽がある、從來は米國縦で、之をつくつたために一切の費用が生産額の  $\frac{1}{3}$  に達する。そこで近來馬來産のメルサワといふ木で樽をつくるやうになつた、これは米國のドラグスファアに勝るといはれるので目下研究中である。猶又パーム油のタンク輸送も考へられてゐる。

かくて目下馬來聯邦内に於て、オイルバーム栽培の目的を以て面積十英反以上の國有地の讓渡下附を申請するものに對し、土地讓渡條令も出來てゐて銳意この栽培に努力してゐる

### ○伊國の經濟復興

伊太利人口の五分三は農民であるから農を以て國本とする、しかし工業に關しても其進歩ははかり、今や水力電氣は百億キロワットを發電し、生糸産額年五萬キントル、人絹二十五萬キントル、各種織物は十二億利に達する。ムツソリニの麥増收戰は一ヘクタールの土地から平均十四キントルを收穫せんとつとめたのであるが、大戰前迄は平均十キントル三の所、現在ば十二キントル半に達し、今一と息で理想實現となつた、然し伊太利はまだ農産物で自給自足が出来ない小麥及家畜の多額を輸入する、甜菜は既に十二萬ヘクタールの面積に達し、近き將來は外國砂糖の輸入を喰ひとめ得と考へられる。野菜果實の生産も改良増加し、昨年度は約二十億利を輸出してゐる、葡萄及葡萄酒製造については根本的改良を加へ、葡萄酒年産額五十億利に達し國庫への税金のみにて八億利に上る。

オリーブ産業は遺憾ながら不振である、産額は近年三百五十萬より百五十萬ヘクトリツトルに低下し、爲めに同油の輸入額を増加した。

養蠶並に製糸については伊國の黄金といはれる國民産業の中心であるから官民一致して其發展に努力してゐる、又荒蕪地の開拓に着手し従業人約八萬は新に百二十萬ヘクタールの土

地を有用化した。

伊國の五分四は山地である、然るに久しき以前より山地の改良を等閑に附したのは頗る残念であつたと考へられ、現今は植林に力をつくしはじめた。

現在では伊國は失業者は激減し、利率は安定し、大藏省貯金局への預金百六十億利、郵便貯金百十億利及銀行預金百八十億利に達してゐる。

以上は簡單であるが六月十一日に、國民經濟大臣がフアシスタ政府の成績としてのべた梗概である。

### ○アルヂエリヤの發展

フランス植民地アルヂエリヤは近世植民地發展の好模範である、百年前には土人は二百萬を超えなかつたが一八九一年に總人口は四、一二四、七三二人最近には六百萬と稱し内に歐人八十六萬七千がある、この人口は主として北部アルヂエリヤ八萬平方哩の地域に居住しその數五百五十萬、残りの五十萬は南アルヂエリヤの沙漠地七十六萬七千方哩の地に散布する。

アルヂエリヤと佛國は完全に獨立した關稅同盟を結び、フランス市場は同國の生産品を消化することが出來ぬから、他國へ輸出する、其生産品は葡萄酒、穀類、鑽石、燐鐵、家畜野菜等であつて主として小麥、大麥、燕麥、烟草、葡萄酒、果實、鑽石、燐鐵、オリグ油、棉花、エスパルト草、葡萄酒、だす。エスパルト草は英國製紙業者には非常な重要品で供給過多の恐れはない。英國は一九二八年に本品二十八萬噸を輸

入して十二萬トンのエスバルト紙を製造し、スコットランドはその製品の高級なるを以て名高い。

アルザエリヤ、チュニス並にモロッコは燐礦の世界産出額の殆ど半數を出す廣大な燐礦脈は植民地の北部を貫通してある一九二七年には八十七萬噸五十四萬磅を英國へ送つた、石炭が十分に採掘されてゐないために、英國炭と交換的に出入される。

アルザエリヤの輸出額は過去五年に三倍し、歳入は過去三年間に二倍した、アルザエリヤには今日百八十六の農業協同組合がある。葡萄酒の醸造組合、野菜烟草の倉庫及農具の倉庫の組合が有力である。

港としてのオランは遙にアルザエー港を凌駕し、一九二八年にオラン港へ入つた船舶は五、五二九隻噸數九百八十萬噸に達した、鐵道は現在三千哩で餘り發展してゐない、しかし自動車運轉は急速に發展し一萬八千哩にのびた、猶航空路はサハラをへて佛國とマダガスカルとの連絡をはかることになつてゐる、アルザエー市の繁榮は自動車の數をみてわかる巴里について割合の數が多い。生活費は巴里よりも高いとさへいはれてゐる。

### ○日本と波斯

昭和四年三月三十日波斯と日本との間に條約關係成立し、我國の貨物は最低稅率の適用をうけることになつた、目下日本と波斯との貿易關係をみるに、我對波輸出總額金九、八五八、八三四冠(冠は二十錢)我國への輸入總額

金三、七六六、四八〇冠であつて同國の輸入に對して二倍の輸出がある、これを戰前に比べて著しい増加といはねばならぬ。蓋し現在では本邦品の大部分は孟買カラチ等よりの再輸出で印度商又は在印度波斯商人の手をへて專賣されてゐるのであるから直接取引をやるやうにすれば大に増加するであらう、最近十年間に於て我國は波斯への輸入國の第九位又は七位になつた、英、露、佛、伊、獨、米、白、イラツ、日本といふ順序であつて戰爭中に諸外國の品物が入らなかつたために急速に日本の貨物が入つたのである。たゞし其後我國は十二位乃至十五位になつたけれども、一九二四年以後我國の輸出は健全なる發達を上げてゐる。

日本からの主要輸出品は左の如くである(一九二八年)

綿	糸	四、五二六、三二三冠
綿	布	二、八九七、九三七
硝子製品		六八七、三九九
陶	器	六二三、九四〇
小間物		四四八、三九一
衣裝數		四四四、〇九五
雜		二三二、七四九

であつて、波斯から日本への輸入品は主として亞片三、六八六、〇〇〇冠である。

### ○世界の自動車數

自動車は近年その製造技術の發達と價格の低下に伴ひ、迅速なる普及發展をとげ、世界到る所の

寒村僻邑と雖も猶且其車體を街路に印せざるはなきの盛況を示めしてゐる。今その數を見るに

世界登録數

増加率

	一九二四年末	一九二五年末	一九二六年末	一九二七年末
計	二一、三七四、五〇六	二四、四五二、二六七	二七、五二七、二三八	二九、六八六、一八九
増加率	—	二六、%	一八、三%	一六、八%

これを大陸別にすると

	自用	商用	計	百分比
アフリカ	二〇四、〇九五	四、七六	二〇八、八六一	〇・八
アメリカ	三、六三二、二五〇	三、三二、六六	六、九六、四一六	八三・七
アジア	二七五、七四六	七三、〇〇三	三四八、七四九	一三
歐洲	二、四三三、九七二	一、二四〇、四七	三、六七四、四四九	三三・二
大洋洲	五七、七五七	三三、八六	九一、六一七	二・一
計	三、二一三、六六	四、四五、三三	三、六六、〇九	一〇〇

これを英國と其以外とに區分すれば

	自用	商用	計	百分比
英帝國内	二、四七〇、二六	六九、七七	二、五四〇、〇三	一〇・五
諸外國	三、六五、四九	三、八四、八五	七、五〇、三四	八九・五

かく英國では人口數に制當ても自動車一臺に三十六人五分である、しかし米國は五人に一臺、ニュージラランドは九人に一臺、加奈陀でも十人に一臺の割合である。しかし佛國では四二人に一臺、獨逸は一六二、四人に一臺、伊太利は二七四、七

人に一臺である、我國のごときは御恥しいほどに少くない。英國でも自動車の發達は、鐵道の旅客貨物を奪うやうになつて、各鐵道會社は自動車兼營をやるやうになつた、恐らく將來近距離の旅客輸送は漸次鐵道から離れて自動車にうつるであらうこゝに於て車道の改良といふことが文化施設上忽にすべからざることとなつて來たといはねばならぬ。

○ペルシヤの定期航空路

波斯にては陸上機關發達し居らず、僅かな鐵道があるのみであるから、自動車又は飛行機が重用される、飛行機の利權は獨逸のユンケル會社の獨占である。今波斯でユンケルのやつてゐる航空路概略左の如くである。

- 一、テヘラン⇨バハラザー⇨バクー間毎月曜日
- 二、テヘラン⇨ハマダン⇨ケルマンシャー⇨カスル⇨シリ
- 三、テヘラン⇨イハバーハン⇨シラーズ⇨ブシル毎木曜日
- 四、テヘラン⇨タブリズ
- 五、不定期線、ニヘラン⇨バンダルシャー⇨ブシヤ⇨アハ

右航空路運賃、テヘラン⇨バクー間邦貨二百六十圓、テヘラン⇨バグダット間四百圓、テヘラン⇨ブシル間三百四十圓、一〇キロマまでは貨物無料とす。